Bernard Malamud の“The Silver Crown”における旧世界からの呼び声

井崎　浩

Calls from the Old World in Bernard Malamud's “The Silver Crown”

Hiroshi IZAKI

序 .

“The Silver Crown”(1972) は、Bernard Malamud (1914-86) の短編としては、“The Magic Barrel”(1958) や “The Last Mohican”(1958) および “Idiots First”(1963) とならび評価の高い作品である。[1] しかし、残念ながら、現在に至るまでの、内容に関する分析や解釈は掘り下げの足りないものが多いと言わざるを得ない。そこで本小論では、作品に新たなる光を当てるべく、「旧世界」と “The Silver Crown” との関係を検討することを狙いとし、“The Silver Crown” 批評に一石を投じたい。そうすることで、Malamud のほかの作品との類似性や本作品の特異性が浮き彫りになるはずだからである。いわば、「旧世界」と関わるものは Malamud の小説には頻繁に見られると言ってよいだろう。そういう共通点に着目しながら微妙な差異にも目配りすることで “The Silver Crown” の真価を再評価できるものと考えている。

I .

ヨーロッパによる新大陸の発見は、あらゆる可能性に満ちた「新世界」の発見でもあった。最初期のアメリカ大陸への移民の多くの目的は、ヨーロッパの旧弊を廃すことを目指し、古くはピルグリム・ファーザーズの「丘の上の町」という神の都市の建設構想に見られるような高い精神性を有するものであった。しかし、その短い歴史の中で、建国の理念は変質し世俗化してしまい、結果的に拝金主義にも近い高度資本主義の国家を生み出してしまう。そのプロセスを追うことは避けるが、理由の一つが、ヨーロッパなど既知の大陸を「旧世界」と断じ、やみくもに否定してしまったことにあるように感じられる。旧ヨーロッパは確かに階級社会であり、アメリカはそれを捨て去り広大な空間と豊穣な天然資源を背景に機会の均等をその価値体系の基底においてきた。[2] しかし機会均等を基盤にした「成功の夢」は 19 世紀末のフロンティアの消滅に象徴されるように上記のごとく変質し、ほかの－「旧世界」のものであるかもしれな

いが－価値観を持たないアメリカ人の多くにとって金銭的、物質的成功だけを意味するところまで来てしまう。

“The Silver Crown”が書かれたのはまさにそのプロセスが完了したとでも言いうるような時代（1972 年）であった。主要登場人物の一人であるユダヤ系アメリカ人 Albert Gans はそうした時代の風潮を一身に浴び、「経験的、客観的に物事を見る」（539）性分の、過度にアメリカに同化した高校の生物教師として登場する。[3] いま、彼の父親は死に瀕しており、医師によって意見が分かれ治療法も分からない状態であった。つまり、経験的・客観的な西洋医学の限界に立ち会っているのだ。父親は心臓が悪いのだと言うがそれも判然とはしない。ここにいたって、すぐにいらだつ性格の Albert は、“angered by the war, atom bomb, pollution, death, obviously the strain of worrying about his father's illness”の状態にあり、“To be able to do nothing for him made him frantic. He had done nothing for him all his life.”(536) と一種の狂乱状態に陥っている。元来、ユダヤ系の父と息子の関係は実に濃密なものとされてきたが、「これまでの人生で父のために何一つやってこなかった」とあるように本来ユダヤ人では強固であるはずの父・息子関係が崩壊するところまで Albert のアメリカ社会への同化は進んでいるのだ。彼の状態を見かねた、一度だけ関係を持ったことのある同僚教師からは「信仰療法」を試してはどうかと薦められるが、当然ながら Albert は浮かぬ顔をするだけであった。

その Albert が心に重荷を背負ってブロンクス辺りの地下鉄の階段を降りようとした瞬間、明らかに知的障がいのある娘（ラビの娘 Rifkele）に信仰療法についてのカードを手渡されるのであった。 カードには“Heal The Sick. Save the Dying. Make A Silver Crown.”(537) とイディッシュ語とヘブライ語と英語で書かれていたが、もちろん Albert は英語を読むのである。 3 つの言語で書かれているがそのうち 2 つが旧世界を思わせるものであるということになると、英語は付け足しのようなもので、実際にはいわば「旧世界」からの招待状とでも言える代物なのである。けむに巻かれたような気分になった彼は、はじめは、とてもその気にはなれなかったが、ラビの住所と名前を見て訪ねる決心をする。なんとなくほっとした気持ちになっているが、本来、“non-mystical”(539) な性格でもある彼にはそぐわない行動であろう。しかし、父親のことで追い詰められている彼にほかの選択肢はなかった。Sheldan J. Hershinow が述べるように、実は彼は意識はせずとも、“desperate attempt to do something for his father stems from guilt at having previously neglected him”(132) を行っているのである。そこにまだ救いはあるかもしれないのだ。カードの住所に行ってみると、店舗の中にある、みすぼらしいシナゴーグで、そこにかろうじてカードにあった“Rabbi J. Lifschitz”(537) の名前を見つけ中へと入ることになる。このシナゴーグが高度資本主義のアメリカで朽ちつつあることは、上記の「旧世界」に属するものが今のアメリカで完全に滅びつつあることを暗示するものでもあろう。その「旧世界」の残る場所へと進む Albert は、不安に襲われ、自分に腹立たしさを覚え、危険とは言えぬまでもなにか戸惑いのようなものを感じて、いつでも逃げ出せるように気を使っていた。“non-mystical”な彼には到底信じられそうもないことがそこで行われていることを感じ取ってのことだろう。こうした設定によって、この短編は“mingles old world and new and touches on the supernatural”(Ochshorn 220) することができるのであり、「旧世界」と「新世界」の関係性を俎上に載せることが出来るのである。ついに出会った Rabbi Lifschitz は死を感じさせる老人臭をだしながら、なかば珍妙なやりとりを Albert と繰り広げることになるが、話の要点は、銀の冠とは何であり、どう作用するのかという事に絞られてい

くが、もう一つ重要なのが、Albert が「父親を愛しているのか」(541) という Rabbi Lifschitz の問いである。それには直接答えず、冠の仕組み、機能、その背後にある原理とか理論的根拠を問い続ける。しかし、それに対するラビの答えはたとえば次のようなものである。

> “What is the crown?” he asked, at first haughtily, then again, gently. “It's a crown, nothing else. There are crowns in Mishna, Proverbs, Kabbalah; the holy scrolls on the Torah are often protected by crowns. But this one is different, this you will understand when it does the work. It's a miracle. A sample doesn't exist. The crown has to be made individual for your father. Then his health will be stored….” (540)

これはいわば「旧世界」のユダヤ人コミュニティ的には効能が保証されていることを告げるものと思われるが、Albert に素直に信じられるものではない。だが、王冠に二種類の値段のものがあることが、彼が王冠を信じてみようかという気持ちにさせたのだと言えよう。すべてを金銭的な価値観で計るアメリカ社会のありように合致するからだ。値段の高いものほど効くはずだというアメリカの価値観にも沿う話になって Albert は王冠を試してみようかという気分になり、陶酔感というかほっとした気持ちにもなるのであった。このとき Albert は“he has, in fact, done nothing more than buy off his guilt for not loving the old man.” (Helterman 132) だったのだと言えよう。いわば愛情を金で購入することにするのだ。障がいのある Rifkele と何度もしっかりと抱き合う Rabbi Lifschitz が示す親子の愛情の質が違うことが強調されているが、Albert の父親への愛情の質はいわばドルという金銭まみれなのである。

しかし、一夜明けると気分は変わっていて、代金を払う段階になって王冠を見せろとラビに迫るのである。 Rabbi Lifschitz はシボレーの新車を買おうというわけではないと言って、アメリカ的価値観に染まっている Albert を諭そうとするが、最後にはその意気込みに負けてラビは王冠を見せることになる。見えたのは 5 秒と続かない。しかし、確かに世にもまれな美しい王冠が見えたのは Albert には事実であった。そして当然のように高い方の金額を支払うのである。だが疑惑は消え去らない。彼は根本的に相手を信用していなかったし、ラビもそれは分かっていると感じていた。

そんな状態が長く続くわけもなく、帰りの地下鉄の中で、Rabbi Lifschitz という詐欺師に催眠術にかけられたと確信して、支払った金を取り戻そうとシナゴーグへと向かう。長く待たされたが誰も出てこずいったん自宅へと戻り、翌日再度ラビの元へと向かう。やはり長い時間待たされたあげく、高価な衣装を着て戻ってきたラビと娘を見て、自分の金で晴れ着を着ていると思い、余計怒りに駆られ、王冠を見せろ、出来なければ返金せよと迫る。それができねば告訴すると宣言したところでラビはたじろぐが、最後にこう言う。“Think of your father who loves you.” それに対する Albert の言葉は、“He hates me. The son of a bitch, I hope he croaks.” (552) という決定的なものであった。一時間後に父 Gans はこの世を去る。いずれにせよ父親は死すことになったのかもしれないが、そこに至る過程での Albert の父への愛情の質が問われているのであり、実は奇跡が起ころうと起こるまいと関係ないのだ。この短編では「信仰療法」を題材にしながら神への信仰はいったん棚上げにされていることに注意したい。Rabbi Lifschitz が“Doubts we all got. We doubt God and God doubts us. This is natural on account of nature of existence.” と述べているからである。だが問題はそれに続く言葉、“Of

this kind of doubts I'm not afraid so long as you love your father.”(541) に Albert が答えられないこと、作品の中で二度問われた父への愛を表明できなかったことが問題とされているのである。いわばドルという金銭にまみれた愛情というかたちでしか表現できない物質主義的なアメリカの中で、父親への愛情という最低限の精神性に象徴されているものが失われていること、すなわち、「旧世界」には確かにあったものが喪失していること、それこそがこの幻想を交えた短編が明らかにするもののひとつなのである。 Albert は“massive, spike-laden headache”(552) を抱えてシナゴーグを飛び出すが、おそらくこの頭痛は一生つきまとうものと思われる。父親を愛することの出来なかった後悔とともに。

II

実は Malamud の短編には、「旧世界」と「新世界」がいろいろなかたちで交錯する作品が少なくない。“The Silver Crown”と比較するために、その中のいくつかの短編を検討してみることにしよう。

“The First Seven Years”(1950) においては、靴屋のユダヤ人 Feld が、病気のため、破産寸前になるが、まるで「旧世界」からの使者のようにして、同郷ポーランドからやってきたユダヤ人 Sobel という男を助手に雇うことになる。見た目はさえないが、意外に有能で数週間で仕事を覚え店を任せられるところまで行くのである。なぜか金銭には執着がなく、ほんのわずかな給金で店を再興させたのであった。Sobel の働きで 5 年後には Feld は娘の Miriam を大学に行かせられるくらいの余裕を持つことが出来ているのだが、Miriam 自身にその気が無く、Sobel が熱心に読み注釈を付けている古典を読むことで満足し、自分は自立したいと宣言するような女性である。Feld は、次善の策として、将来有望な、公認会計士を目指す Max という学生に目を付け、二人を結婚させようとするのである。そうすることで社会の階段を上がり裕福な人生“a better life”(70) を歩ませたいという望みを持つ。二人の若者のデートをセッティングしている間に Sobel は店から姿を消して戻らなくなるが、なにかの癇癪だと思って Feld は気にしない。二人の若者は二回デートをするが、Miriam はもう Max には会わないという。“He has no soul”そして“He is a materialist.”(75) とまで言うのであった。失望に加えて、新しく雇った助手が店の金をくすねていたことを知った Feld は心臓発作を起こす。 Feld の病気が心臓だというのは、比喩的には彼の“Heart”に問題があることを示唆しているが、やむをえず Sobel を迎えに行くことにするのである。「いつ仕事に戻る？」と聞く Feld に 驚いたことに Sobel は“Never”と答える。さらに驚いたことに、賃金を上げる、息子のように接してきたではないかと言うと、賃金のことなど知ったことではない、それになぜ、Miriam の相手に自分を考えなかったのかと言うのである。うすうす二人のことを感じていた Feld だが、それを拒絶する。すると Sobel は

> “Why do you think I worked so long for you?" Sobel cried out.
> “For the stingy wages I sacrificed five years of my life so you could have to eat and drink and where to sleep?"
> “Then for what?" shouted the shoemaker.
> “For Miriam,” he blurted － “for her.”(77)

と本音を漏らすのである。それに対する Feld の答えは、“I pay wages in cash”という、つまり Miriam への愛情を「金で買う」と告げてしまうのであった。ここで自分がいかにアメリカ式の発想法に毒されているかを無意識に感じ取った Feld は沈黙に陥ってしまう。それに、Miriam には、“Who I am and what is in my heart”(77) が分かっていると、アメリカ的価値観に染まった Feld には絶対言えない台詞を Sobel は告げるのである。つまり彼には「旧世界」から持ち込んだ、アメリカ式とは全く別の価値観が生きていることを宣言したも同然である。Feld はここにいたって、"Hitler's incinerators" (77) をからくも逃れてやってきた移民への強い同情心とともに Sobel の人間性に気づくのである。だからこそ、“all these dreams [for Miriam] of a better life were dead”(78) と思いながら、Sobel に Miriam への 2 年後のプロポーズを許すのだ。自分の描いた夢とは違う、精神性の高い“another better life”があることを認めたことになろう。そして自らもアメリカ式の価値観からもう一度「旧世界」にあった価値観を取り戻すのである。ところで、タイトルの“The First Seven Years”の意味するところは登場人物のパースペクティヴを超えたもので、Malamud によって、この物語を旧約聖書の創世記の挿話に緩やかに結びつけられたものである (Ochshorn 53)。そうすることで、いっそう、この物語を精神的なものと重ね合わせようとする狙いがあるものと思われる。

また、Malamud の代表作と言われる“The Magic Barrel”(1954) は、ラビ候補生である Leo Finkle が、結婚していた方が教区内でより多くの信者を獲得できるという功利主義的な理由から結婚を決意する。ラビ候補生という精神的なものに仕える職業を選びながら、どこかでアメリカ的な価値観に毒されているのである。とはいえ、相手のあてがあるわけではなく、仕方なく結婚仲介人 Salzman を喚ぶことにする。この Salzman が冗談めかしたりからかったりする様子で Leo に接していくが、言っていることは、ユダヤのしきたりや慣習で、広い意味で彼も「旧世界」からのメッセンジャーだとも受け止められるのである。 Salzman の仲介でかなり年上の女性とお見合いをした結果、Leo は自分がいかに“loveless”で“unloved” (143) であったかという恐ろしい認識に至る。しかし、そこからの Salzman とのやりとりを通して徐々にアメリカ的価値観から脱していき、最後には、ひどく荒れた生活（一説では娼婦の経験があるとする評者もいる）をしていた Salzman の娘 Stella と結婚しようと決意をするのである。これには、他者を救うというラビ本来の務めに目覚めると同時に、自分のあがないをもそこに見る Leo がいる。Salzman がここまで彼を導いたとも読める内容となっており、主題の一つはやはり、アメリカにはない、「旧世界」の価値観の復活である。

“The Last Mohican”(1958) では、ジオットの研究をするためイタリアにやって来た Fidelman がそこでユダヤ乞食と見まがうような Susskind にさんざん追い回される羽目になる。Fidelman はやはりアメリカにすっかり同化しており、ユダヤに関することには基本的に興味が無い。だから、ユダヤ人の苦難に満ちた裏面史を持つローマを見ていながら“Eternal City”(200) などという感慨しか抱かない。Susskind は、そんな Fidelman につきまとうようにしながら、歴史、自由、責任、人間、ジオットの絵画の精神、ユダヤ人のアイデンティティなどへの答えを迫るのである。後半、逆に Susskind を追う立場になった Fidelman は、その過程で本来アートを巡る旅を予定していたのに、それは変質し、ローマの裏の顔を知り、また“labyrinthine maze of Jewish history…to synagogue, Jewish ghetto, and ceremony” (Kremer 130) とあるように、シナゴーグやみすぼらしいユダヤ人墓地などさまざまな場所を巡る中で、彼の中でなにかが発動する。それは、Ezra Greespan が指摘するように、“reversed

the process by sending Fidelman back to ghetto − and one of the oldest ones, at that − to discover the true nature of his identity.” ということになる。[4] ラスト近くで、Susskind の粗末な部屋に入り込んだ Fidelman は、「寒さ」というかたちで、他者の苦悩を身をもって知ることになる。結果的には逆に「温かさ」というかたちでジオットの絵画の精神を理解する頃までには、彼は上記の Susskind の投げかけた問いへの解答も感得できていたと言ってよい。ここでもまた、アメリカ的価値観からは疎外された問題が突きつけられており、Fidelman はまさにローマという旧世界で、「旧世界」的な価値観を始めて得るのであった。

さらに、“The Bill” (1951) においては、ビルの管理人 Willy が、最近近所に出来た、とても繁盛しそうにもない Panessa 老夫妻の食料品店に通い詰める。店主が「つけ」でものを売るのを知ったからである。みるみるうちに金額は膨れあがってしまい Willy には返済のあてのない額になってしまう。そろそろ一部だけでも払ってもらえますかと聞かれた彼は、それから二度とその店には近づかなくなる。だが、その前に、彼は Panessa から次のような驚くべき言葉を聞いていたのである。“He said that everything was run on credit, business and everything else, because after all what was credit but the fact that people were human beings, and if you were really a human being you gave credit to somebody else and he gave credit to you.” (87) これはアメリカでは考えられない、やはり「旧世界」の言葉だと言えよう。この言葉は、“As much as Morris Bober's frequently quoted credo, which is at the center of The Assistant, Panessa's words express what is for Malamud ideal human relationship.” (Solotaroff 49) なものであってきわめて重要な発言である。後になって、“credit” という言葉を口真似してみる Willy であったが、侮蔑だけではない何かをそこには感じることが出来る。その後、Panessa 老夫妻の姿に、やせて羽を失いつつある小鳥や、やせ細った灌木のイメージを見た Willy にはある変化が訪れる。相変わらずつけの代金を支払う余裕は全くないのだが、一生懸命働くようになったのである。朝早くから起きて掃除、モップがけ、手すりにはワックスがけをする姿には、建物と言うより自分自身をクリーンにしようという無意識の衝動が感じられる。ビルの住人の苦情にも素早く対応するようになり確かな変化はあるのだが、金はいっこうに貯まらないままだ。ある朝、衝動的にコートを質屋にいれ 10 ドルを手にすると Panessa の元へ向かうが、知らされたのは Panessa の死であった。悲劇的な結末を迎える作品であるが、Panessa の発した言葉の重要性を見逃すわけにはいかない。それは Willy をも変えるものだったからである。それは悲惨な結末とそれを抱えて生きていかねばならないにもかかわらず、今後の Willy の生活に必ずやよい変化をもたらすことが暗示されているとも言えよう。

一方で、「旧世界」の言葉や価値観が届かない失敗例もある。“The lady of the Lake” (1958) では、自分のユダヤ系の名前を捨て、つまり自分の過去を捨て新たなロマンスとの出会いを求めてヨーロッパにやってくるユダヤ系アメリカ人 Freeman という人物を主人公としている。そこで出会った Isabella という女性と恋仲に近い状態になり、なんどもユダヤ人ではないのかとの相手の言葉を否定しているが、彼は結局、“to admit his connection to history, to suffering, to his relationship and obligation…to others” (Aarons 101) を拒絶しているも同然であり、結末は 次の引用にあるように Isabella がホロコーストの生き残りであり、胸に刻印された数字を見せながら、自分の過去を捨てることはできないので Freeman とは結婚はできないと拒絶されてしまう。

Slowly she unbuttoned her bodice, arousing Freeman, though he was thoroughly confused as to her intent. When she revealed her breasts—he could have wept at their beauty (now recalling a former invitation to gaze at them, but he had arrived too late on the raft)— to his horror he discerned tattooed on the soft and tender flesh a bluish line of distorted numbers.

“Buchenwald,” Isabella said, “when I was a little girl. The Fascists sent us there. The Nazis did it."

Freeman groaned, incensed at the cruelty, stunned by the desecration.

“I can't marry you. We are Jews. My past is meaningful to me. I treasure what I suffered for.” (240)

安易に過去を捨て去ったことが思わぬ結末を迎えるのだが、「旧世界」で生き抜いてきたユダヤ人への想像力に決定的に欠けていた Freeman には Isabella との恋は成就しないのである。

また、“The Jewbird” (1963) では、ユダヤ人一家の元へ突然、喋る鳥が舞い込んでくる。その Schwartz と名乗るユダヤ鳥は、「ゲバルトだ、ポグロムだ」(323) と叫び、反ユダヤ主義者からかろうじて逃げてきたのだという。マジカル・リアリズムの手法で書かれたこの小説では、ユダヤ鳥は旧世界の住人の象徴、それも、ホロコーストから逃れてきたユダヤ人の象徴である。ところが、旧世界での出来事に関心の無い一家の主の Cohen は、ことあるごとに Schwartz に食事も含めつらく当たり虐待までするのである。そこには、ユダヤ人への同胞意識や、ユダヤ人のアイデンティティ、ひいては、ユダヤ的な伝統や文化を否定してしまっている、アメリカに同化しきったユダヤ人の姿が投影されているのだ。しかし、実際には Schwartz は、“a subconscious double who represents that part of Cohen, his Jewish identity” (Hershinow 125) であるのに、最後にはひどいかたちでユダヤ鳥を追い出してしまい、結局、反ユダヤ主義者にむざむざと Schwartz を殺させてしまうのである。

ここで取り上げた各短編とも、強弱や濃淡の違いはあっても「旧世界」のなにかを垣間見させるものとなっており、“The Silver Crown” と比較すると興味深い見解が得られよう。このほかでも、” The Loan” (1952) 、“Angel Levine” (1955) 、“Idiots First” (1961)、“The German Refugee” (1963) 等（もっとあるかもしれない）といった作品でも比較検証は可能だろう。総じて言えることは、アメリカに（過度に）同化した人間に、もう一度「旧世界」にはあった価値観や文化や伝統、アイデンティティ、同胞意識を呼び覚ますことを Malamud は執筆動機の一つにしているのではないかと推測出来るということである。決してそれだけに各短編を集約し還元しようなどとは思ってもいないが（テーマ的なものは多岐にわたっているのは当然である)、少なくともきわめて重要なモチーフとなっていることを確認できるのである。次節では、さらにその点を深く追求してみたい。

Ⅲ

「新世界」アメリカの住人にとってヨーロッパをはじめとする旧世界は唾棄すべきものとさ

れてきた。ユダヤ系移民にとっては特にそうで、昔からの人種差別、ポグロム、ゲットー、ひいてはホロコーストなど、何もいいことなどなかったも同然であろう。しかし、そんなユダヤ系移民がアメリカ社会に持ち込んだものがあったのである。それが、本論で扱っている小説の主要人物 Albert に投げかけられているのである。

Malamud が、イディッシュ語やイディッシュ文学、ユダヤ人の歴史などに本格的に接するのは、つぎの R. Sorotaroff の報告のように、1914 年生まれの Malamud としては、かなり後年になってのことだった。

> The early years of apprenticeship coincided with the increasing horror of what was happening to Jews in Europe, and Malamud began to read books by and about them. In October 1943, for example he wrote to a woman he was to marry two years later, "I've also been reading a book on 'what a Jew believes' about which I know very little." Paradoxically, marrying a gentile intensified his brooding over the nature of his Judaism, for it made Malamud "ask myself what it is I'm entitled to in Jewish experience." The most productive entitlement was the repeated and powerful kindling of his imaginative powers by his identification with the other terribly oppressed Jews of the Pale— "in particular the…immigrants of my father's and mother's generation." (30)

あるインタビューで、Malamud は、"I received little in the way of a Jewish education." (Leviant 48) と言っている。そうするとユダヤ的伝統をほとんど意識せずに育った Malamud が父親をはじめとするユダヤ系移民の生に核心に、アメリカ生まれの自分にはない言わば「旧世界」から持ち込まれた伝統的な価値観を感じ取り、それに漠然とした違和感を抱いたとしても不思議はない。彼のユダヤ的なものに対する知識はかなり一面的であったとする批評家が多いのだが、その自覚的な学習の段階で、おそらくは彼の中に芽生えつつあったモチーフと、イディッシュ文学などに見られる、特に東欧のユダヤの伝統（ゲットーに囲い込まれ、まさに牢獄的な状況にありながら豊かな精神性を開花させた）が結びついても不思議ではないのだ。その辺りの事情を Robert Alter は次のように述べている。[5]

> Malamud sees, moreover, in the collective Jewish experience of the past a model not only of suffering and confinement but also of a very limited yet precious possibility of triumph in defeat, freedom in imprisonment. His reading of Jewish history is clearly undertaken from a rather special angle, and with perhaps less than adequate information—European Jewry, even in the ghettoes, often was…much more than a trapped group of "half-starved, bearded prisoners." Historical Accuracy, however, is beside the point, for what is relevant to Malamud's literary achievement is that an aspect of Jewish experience, isolated and magnified, has afforded him the means of focusing in an image his vision of human condition. (35)

この Malamud の姿は、長編第二作目の *The Assistant* (1957) におけるイタリア系の青年

Frank Alpine の次のような行動を思わせなくもない。

> He read a book about the Jews, a short history.... He skimmed the bloody chapters but read slowly the one about their civilization and accomplishments. He also read about the ghettoes, where the half–starved, bearded prisoners spent their lives trying to figure it out why they were the Chosen People. He tried to figure out why but couldn't. (191)

ユダヤの歴史を知らなかったという点で共通する二人だが、書物を通じて、苦難のさなかにありながら達成された“civilization and accomplishments”を確かに感じ取ったのである。さらに後には、次のような興味深い記述がされる。“...he took out a book he was reading. It was the Bible and he sometimes thought there were parts of it he could have written himself.” (245) これは後に Frank がユダヤ教に改宗することの布石だが、それだけにとどまらず、Malamud 自身が聖書的な（旧約と思われるが）記述法を身につけた、言い換えれば、自学の成果として、作品を物語る「声」を手に入れたことをうかがわせる描写でもあろう。

だから、当時現役のラビであった David J. Zucker は Malamud のいくつかの短編を“modern Midrash”と呼んだのであろう。[6] “Midrash”とは、旧約聖書についての古代ユダヤ人の注釈のことで、当然ながら、ユダヤの精神と英知の集合体である。今までに検討した Malamud の短編群にはその“Midrash”のエッセンスと同等のものが詰まっていると考えられる。つまり、これこそが Malamud 作品における「旧世界」の「声」なのである。Zucker は、“The Silver Crown”にも言及しているが、扱いはいわゆる陰画的なものと言える。しかし、陰画的な扱いとはいえ、それを反転させればポジになるわけで、その意義が否定されるものではない。

また、Zucker は、別の論文で、対照的な結末を迎える“Angel Levin”(1955) と“The Silver Crown”をユダヤ教、キリスト教の両面から詳細に比較しているが、結末の違いを除けばそこに質的な差は無いことを立証している。[7] やはり、“Midrash”に代表される「旧世界」の声はここにも響いているのである。

さらに、Malamud がユダヤ人思想家 Martin Buber（1878 − 1965）の影響を受けていることは半ば常識化しているが、[8] Buber からの影響の中でも、東ヨーロッパの大衆の間に広がったハシディズムと呼ばれる神秘主義的な復古運動に大きな関心を持っていたことがうかがわれる。[9] “Midrash”同様、ユダヤの英知と精神性が込められたものと見てよいが、Marcia B. Gealy によれば、Malamud の短編群のうちいくつかは、ハシディズムの伝統を 現代風に“Reshaping”(51) し、“Reworking”(61) させたものだということになる。[10] “The Silver Crown”にも言及があり、ハシディズムの伝統から分析しているが、Albert の言動にはいわば許されざる罪とも言うべきものがあることを明らかにする（60)。ここにもやはり「旧世界」の声は響いているのである。

以上のように自覚的な学習の段階で Malamud は、いわば「旧世界」に属するもの、それも、文化や芸術、文学や民話、教育や神学、倫理や道徳などについてのユダヤ人の業績に着目し、それに新たな光を投げかけて、自分なりに咀嚼し解釈し直して現代にも通じるなにかを発見したに相違ない。それこそが、今まで考察してきた“The Silver Crown”をはじめとする短編群

に「旧世界」の声として響いているものだと考えられるのである。

終わりに

Malamud はユダヤの歴史や伝統を学習する中で上記のようなものに触れ、ある確信を持ったものと考えられる。迫害や追放の歴史の中で、その苦しみの中でこそなにかが発動するということをである。それこそが塗炭の苦しみを味わわされてきたユダヤ人の歴史から Malamud が学んだことだったと想定される。“The Silver Crown”の Albert の場合も例外ではない。父親への愛情と憎しみの狭間で彼なりに苦しんでいるからである。「経験的、客観的に物事を見る」Albert がまがりなりにも王冠を買おうとしたことは、ドルにまみれた愛情ではあっても以前の彼には考えられない行動だった。しかし、結局はそれを自ら打ち消してしまう姿に、高度資本主義の現代に生きる人間の難しさが現れていよう。そして、ユダヤ系移民たちが持ち込んだ「旧世界」的な価値観も、朽ちゆくシナゴーグ同様滅びる運命なのかもしれない。しかし、少なくとも Albert の場合は、「後悔の念」というかたちで、王冠状の頭痛とともに、「旧世界」からの呼び声は残るのかもしれないのだ。[11] “The Silver Crown”とは、そのわずかな可能性に Malamud が賭けているとも読める作品なのである。

Notes

1. Robert Sorotaroff は“one of best stories”(124)、Kathleen G. Ochshorn は“ranks among Malamud's best (220)、Edward A . Abramson は、“one of the best stories in Rembrandt's Hat”(134)、Robert Kiely は“Perhaps the best story of the collection[Rembrandt's Hat]”(353) と述べている。
2.『アメリカを知る事典』の「成功の夢」の項目 (252) による。
3. "The Silver Crown" および他の短編からの引用はすべて *The Complete Stories*. による。以降、ページ数のみを記す。
4. Qtd. in Kremer, p. 151.
5. このパラグラフは、過去の拙論の一部を再掲したものである。p. Ⅲ.
6. Zucker は、“modern Midrash”として、“The Silver Crown”のほかにも、“The First Seven Years”、*God's Grace*、“Idiots First”、“The Lady of the Lake”、“The German Refugee”、*The Assistant*、*A New Life* を挙げている。“Malamud as Modern Midrash”を参照。
7. Zucker の“Strangers”を参照。
8. 影響関係の指摘は、たとえば、Hays (227-31) や Abramson (33-35) を参照のこと。
9. ハシディズムの簡略な説明については、ロス 224-226 頁を参照。
10. Gealy はハシディズムの伝統を継ぐものとして、“The Silver Crown”のほかにも、“The Last Mohican”、“Idiots First”、“The Jewbird”を挙げている。
11. Gealy は、“a lifetime of regret”(60) が残ると述べている。

Works Cited

Aarons, Victoria. “Midrash, Memory, and ‘Miracles or Near-Miracles.’” *A Centennial Tribute: Bernard Malamud*, edited by Aarons, Victoria and Gustavo Sanchez Canales, Wayne State UP, 2016, pp. 89-108. Print.

Abramson, Edward A. *Bernard Malamud Revisited*. Twayne, 1993. Print.

Alter, Robert. “Jewishness as Metaphor.” *Bernard Malamud and the Critics*, edited by Field, Leslie A. and Joyce W. Field, New York UP, 1970. Print.

Gealy Marcia B, “Malamud's Short Stories: A Reshaping of Hasidic Tradition.” *Judaism: A Quarterly Journal of Jewish Life and Thought*, Vol. 28 (1) Winter 1979, pp. 51-61. Print.

Greenspan, Ezra, *TheSchlemiel Comes to America*. Scarecrow Press, 1983. Print.

Hays, Peter, L. “The Complex pattern of Redemption.” *Bernard Malamud and the Critics*, edited by Field, Leslie A. and Joyce W. Field, New York UP, 1970, pp. 219-233. Print.

Helterman, Jeffrey. *Understanding Bernard Malamud*. U of South Carolina P, 1985. Print.

Hershinou, Sheldon J. *Bernard Malamud*. Frederick Ungar, 1989. Print.

Kiely, Robert. “Rembrandt's Hat.” *New York Times*, Jun. 3, 1973. p. 353. Print

Kremer, Lillian S. “Reflections on Transmogrified Yiddish Archetypes in Fiction by Bernard Malamud.” *The Magic World of Bernard Malamud*, edited by Avery, Evelyn, State U of New York P, 2001, pp. 123-138. Print.

Leviant, Curt. “My Characters Are God-Haunted.” *Conversations with Bernard Malamud*, edited by Lasher, Lawrence, UP of Mississippi, 1991, pp. 47-53. Print.

Malamud, Bernard. *The Assistant*. Farrar, Straus, and Giroux, 1957. Print.

---*The Complete Stories*. Farrar, Straus, and Giroux, 1997. Print.

Ochshorn, Kathleen Gillikin. *The Heart's Essential Landscape: Bernard Malamud's Hero*. P. Lang, 1990. Print.

Solotaroff, Robert. *Bernard Malamud: A Study of the Short Fiction*. Twayne, 1989. Print.

Zucker, David J. “Malamud as Modern Midrash.” *Judaism: A Quarterly Journal of Jewish Life and Thought*,” Vol. 43, No. 2, Spring, 1994. www.questia.com/magazine/1G1-15524311/malamud-as-modern-midrash 7 November 2 018. Web.

--- “Strangers, Angels and Redemption: Jewish/Christian Images in Two Malamud Stories.” *Conservative Judaism*, Vol.37 (3) Spring 1984, pp. 43-50. Print

井崎　浩「《牢獄》のモチーフと抽象化の手法―Bernard Malamnd の初期作品と幼少年体験との逆説的関係―」『久留米工業大学研究報告』No.20,1996,pp.107―115.Print.

斉藤真、金関寿夫、亀井俊介、岡田泰男　監修、『アメリカを知る事典』、平凡社、1986。Print.

シーセル・ロス著、長谷川真、安藤鋭二　訳、『ユダヤ人の歴史』、みすず書房、1966。Print.